

福島遺跡入垣地区(Ⅲ) 定留遺跡向地区

1997年度 中津地区遺跡群発掘調査概報(X)
中津市文化財調査報告 第22集

1998

中津市教育委員会

例　　言

一、本書は中津市教育委員会が1997年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。

一、調査は1997年度国宝重要文化財等保存整備事業費及び1997年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

一、調査団の構成は下記のとおりである。

一、調査主体 中津市教育委員会

　調査責任者 前田 佳毅（中津市教育委員会教育長）

　調査指導 賀川 光夫（別府大学名誉教授）

　小田富士雄（福岡大学教授）

　後藤 宗俊（別府大学教授）

　和佐野喜久生（佐賀大学教授）

　甲斐 忠彦（大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長）

　真野 和夫（同 調査課長）

　調査事務 麻川 尚良（中津市教育委員会市民文化センター館長）

　田中布由彦（同 係長）

　富田 修司（同 主任）

　調査員 高橋 徹（大分県教育庁文化課副主幹）

　調査担当 高崎 章子（中津市教育委員会市民文化センター主任）

　花崎 徹（同 技師）

上記の他、宮内 克己氏（大分県教育庁文化課主査） 小柳 和宏氏（大分県教育庁文化課主査）より現場にて有益なご助言、ご指導を頂いた。

一、遺物整理は秋吉三和子、岩崎弘子（中津市歴史民俗資料館）が行った。

一、遺物の実測、トレース、写真撮影は、花崎が行った。

一、遺構の実測、写真撮影は、高崎、花崎が行った。

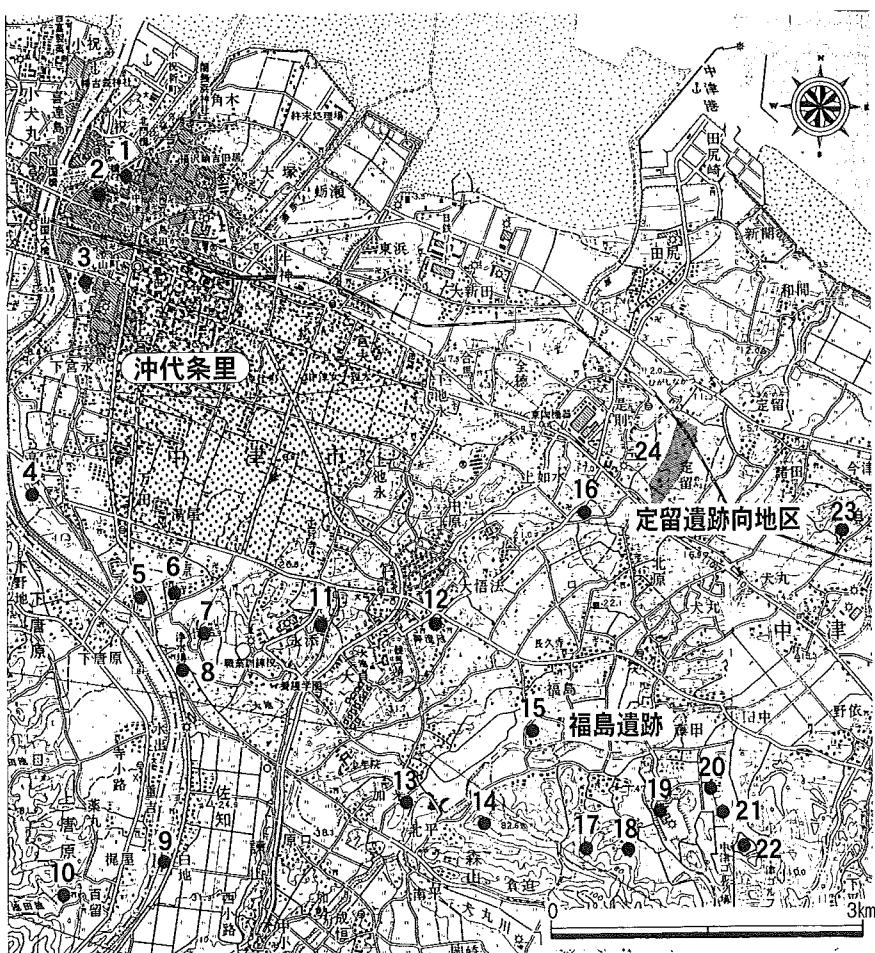
一、本書の執筆、編集は第3章1と2の(1)、(2)、(4)を高崎が、ほかを花崎が行った。

一、現場作業は下記の皆さんによる。

辻原 霞、寺内勝美、植山トミ子、宮崎真理、黒川みゆき、草野郁雄、黒川洋美、辛島雅美、植山京子、松本勲、植山松枝、今永キク子、植山ヨシカ、徳永賀子、田原文子、中 和代、山縣信夫、泉 貞世、熊谷朝子、岩本敏美、若木和美、中村香代子、田中トミ子、花田郁夫、塩谷絹子、石塔美代子、福山美樹、中山裕枝、水澤ミキヨ、中村香代子、今石智子

目 次

第1章 地理と歴史的環境	1
第2章 福島遺跡入垣地区(III)	2
1. 調査に至る経緯	2
2. 調査の概要	3
(1) 弥生時代	3
(2) その他の遺構	9
(3) 小 結	10
第3章 定留遺跡向地区	11
1. 調査の経緯と概要	11
2. 向地区的調査	11
(1) 水田について	11
(2) 畑について	12
(3) 壁穴住居について	15
(4) 小 結	16
図版1 福島遺跡入垣地区	17
図版2 ツ	18
図版3 定留遺跡向地区	19
図版4 ツ	20
図版5 ツ	21



第1図 中津地方主要遺跡分布図

第一章 地理と歴史的環境

中津市は大分県の北部に位置し、人口約68,000人、市域面積55.67km²を有する。中津市の地形は、沖代平野と洪積台地とに大別される。

中津地方の遺跡は旧石器時代から古墳時代まで主にこの洪積台地、通称下毛原台地に分布する。

旧石器時代の遺跡は発見例が少なく多くを語る資料はない。

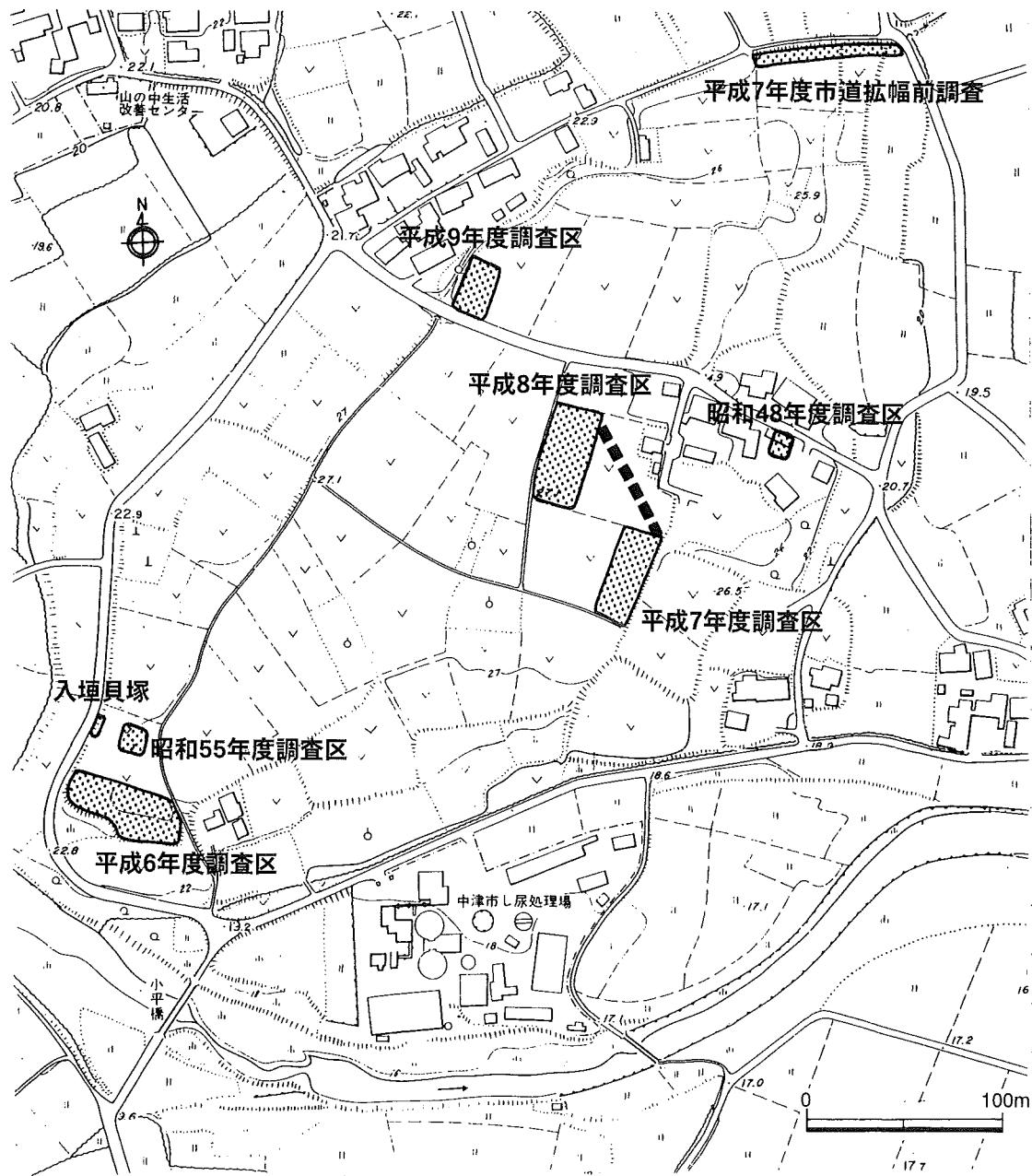
縄文時代の遺跡は、棒垣遺跡、入垣貝塚、高畠遺跡など縄文後期に属する。

弥生時代の遺跡は、福島遺跡、犬丸川流域遺跡群、森山遺跡などが挙げられ、福島台地近辺に多く点在している。

古墳時代の遺跡は、台地上に墓地が分布し、自然堤防上や微高地に集落が分布する。また丘陵上には野依伊藤田窯跡群が立地し、須恵器、須恵器質瓦の生産が認められている。白鳳時代から奈良時代にかけての遺跡は、沖代条里跡、長者屋敷遺跡などが挙げられる。長者屋敷遺跡は、下毛郡衙の正倉でないかと思われる。沖代条里は今もその景観をたどることができる。

中世の遺跡は、犬丸川流域遺跡群が挙げられる。犬丸川第7地点では、二重環濠により区画された居館などが確認されている。

第2章 福島遺跡入垣地区（III）



第2図 福島台地周辺地形図

1. 調査に至る経緯

福島遺跡は、標高約27m程、犬丸川左岸部の台地上に立地する。この台地上周辺は畑地、水田が多く遺跡の保存状態も極めてよい。しかし近年個人住宅などが建ち始め台地の景観も変わりつつある。この事態を踏まえて、中津市教育委員会では、平成6年度より3回の確認調査を行っている。平成6年度は福島台地の南に位置する畑地で調査を行った。縄文から中世に至る土器片、縄文時代の土壙墓などが検出された。平成7年度調査区からは、弥生時代中期の溝状遺構が検出された。溝からは大量の弥生土器が出土した。そこで平成8年度は、この溝状遺構の続きを検出するために、平成7年度調査区より50m程北西の畑地で調査を行った。平成7年度調査区から平成8年度調査

区までは宅地化のため地下げを行っており遺構は完全に消滅していると思われる。溝がほぼ直線に進むことを想定してトレーニチを設定した。その結果、弥生時代の溝を検出することができた。溝から出土した土器は、前年度と同時期と思われる。また溝の埋土、形態も類似しており平成7年度の溝の続きであると思われる。溝はさらに北西方向に進むと思われた。

そこで今年度は、この溝の北限を探すため平成8年度調査区より北西に約100m程離れた畑地を調査の対象とした。

2. 調査の概要

調査は前年度の溝状遺構が北西にほぼ直線に進むことを想定して行った。調査区の畑に3m幅のトレーニチを3本設定して行った。遺構の全景が不明の場所は、トレーニチを一部拡張した。これまでの調査で、遺構検出面までの層から土器片を検出できたので、すべて手堀りで行った。地表面から約40cmは明褐色土層（現耕作土）である。土師器片、陶磁器片を僅かに検出できた。2層は暗褐色土層でやや粘質である。この層からは土師器片、須恵器片、弥生土器片などを検出することができた。3層は黄褐色土層で地山と思われる。

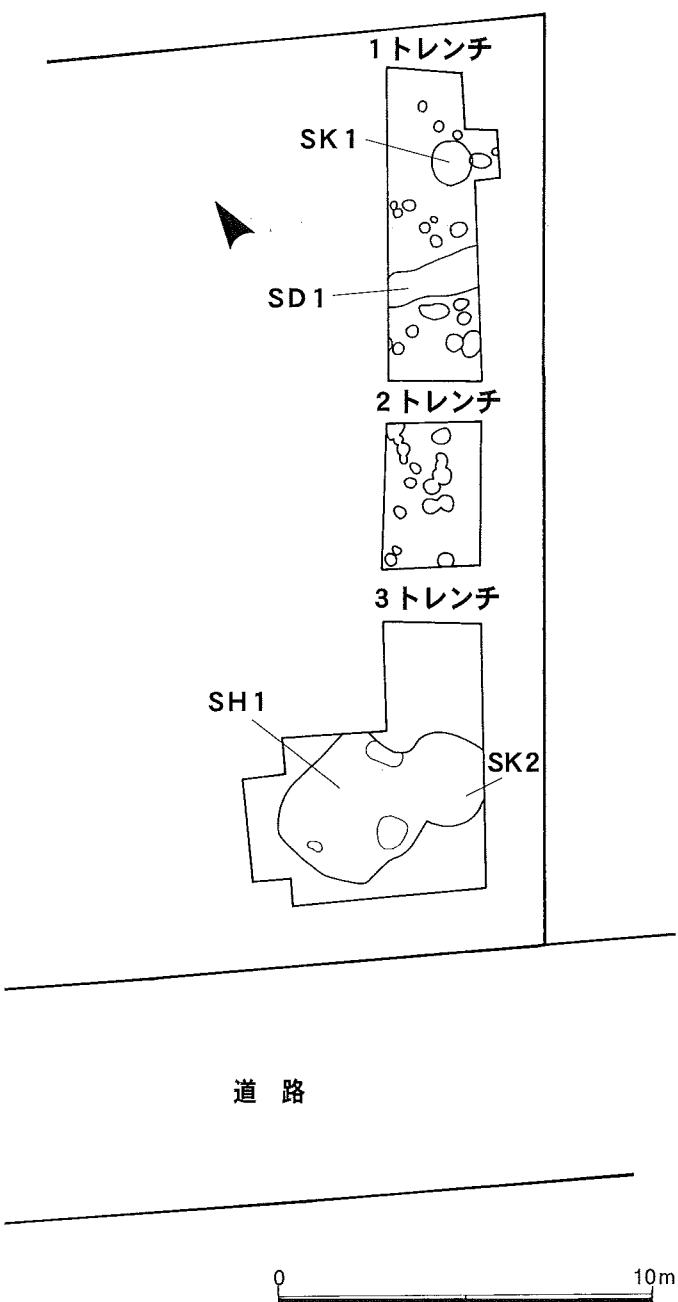
この層まで掘り下げるとき、明確な遺構ラインを検出することができた。これは前年度までの調査区とほぼ同様であった。

1トレーニチからは時期不明の溝を1条、弥生時代の土壙1基、時期不明のピット多数を検出した。2トレーニチは、時期不明のピット多数、3トレーニチからは、弥生時代の土壙1基、弥生時代の竪穴住居1基が検出された。1トレーニチから3トレーニチまで検出したピットは掘り下げなかった。

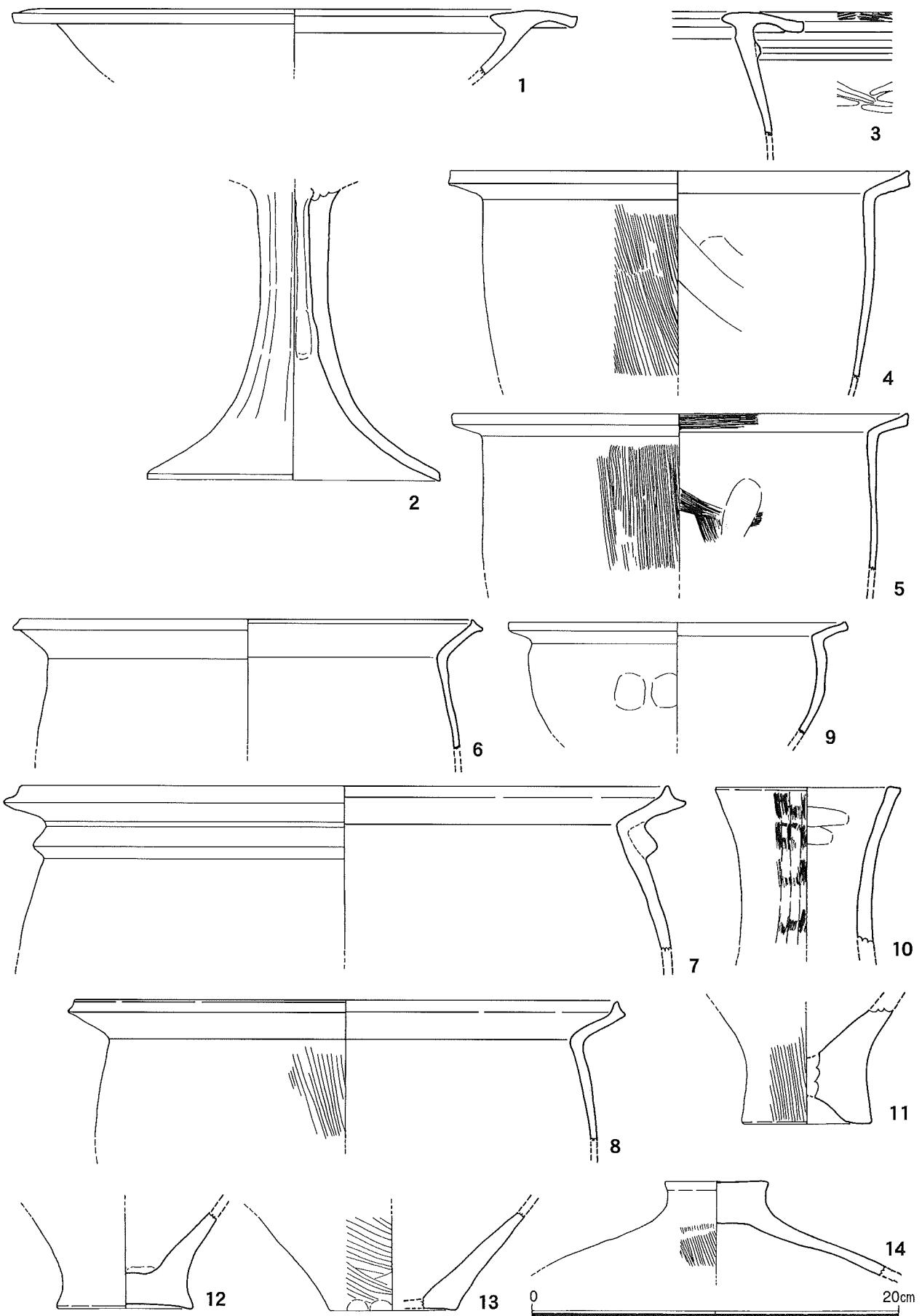
(1) 弥生時代

SK1

1トレーニチから弥生土器片を多く含む土壙が1基検出された。遺構ライン検出面より20cm程上



第3図 入垣地区遺構配置図



第4図 入垣SK1出土遺物

層より遺物が検出されていることから、土壙は2層より掘り込まれていると思われる。最大幅約100cmで円形をなす。深さは遺構検出面より約20cmであったが、本来は40cm程であったと思われる。また弥生土器片は、ばらばらに破碎されており、出土状態からみて、一括廃棄されたものではないかと思われる。

S K 1 出土遺物

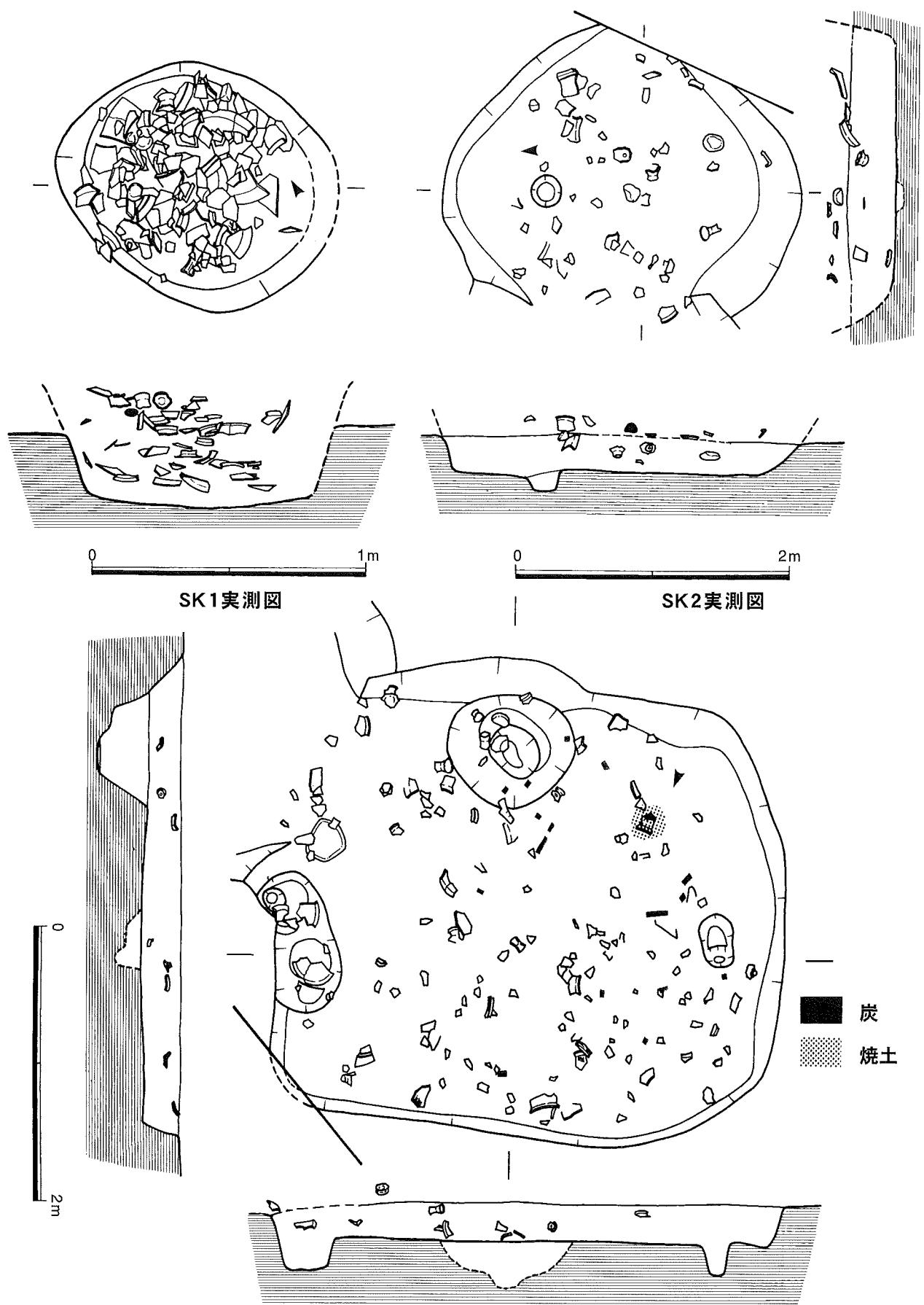
1は鋤先状口縁部をもつ高坏である。内外面とも朱塗り痕が見られる。焼成は良好で復元口径30.6cmを測る。2は高坏の脚部である。外面に朱塗り痕が見られる。また外面に縦方向のナデを施す。復元底径15.8cmを測る。3は『L』字状口縁部の甕である。口縁端部はやや下方へ垂下する。また口縁部直下に一条の『M』字状突帯をめぐらす。内面に朱塗り痕が見られ、外面は胴部、口縁部に丁寧なミガキを施す。4は口縁部を『L』字に屈曲する甕である。口縁端部を跳ね上がり状に仕上げる。外面はハケ目、内面はナデを施す。復元口径25cmを測る。5は4と同じで、口縁端部が跳ね上がる甕である。口縁部に朱塗り痕が見られる。内外面にハケ目を施す。復元口径は24.8cmを測る。6も口縁端部が跳ね上がる甕である。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。復元口径24.4cmを測る。7も口縁端部を跳ね上げる甕である。口縁部直下に一条の三角突帯がめぐる。また4.5に比べ胴部が張り出す。内外面とも調整は不明である。復元口径35.2cmを測る。8も口縁端部を跳ね上げる甕である。外面に粗いハケ目を施す。復元口径29.4cmを測る。9は高坏か。口縁部は短く『L』字に屈曲する。内面に朱塗り痕が見られる。外面の調整は不明である。復元口径18.4cmを測る。10は器台になると想われる。外面はハケ目を施した後、縦方向へのナデを施す。また外面に朱塗り痕がわずかに残る。復元口径10cmを測る。11は甕の底部になると思われる。上げ底で復元底径は7cmを測る。外面にハケ目を施す。12も甕の底部になると思われる。やや上げ底で底径は7.2cmを測る。内外面とも調整は不明である。13は壺の底部になると思われる。外面に丁寧なミガキが施される。胎土も細かく焼成も良好である。復元底径は6.8cmを測る。14は蓋か。外面はハケ目を施す。

S K 2

3トレンチからも弥生時代の土壙と思われる遺構を検出することができた。土壙は最大幅約260cm。一部弥生時代の竪穴住居跡とかさなっており全景は明らかでないが、方形にちかい形になると想われる。深さは約25cm程であるが、これも遺物の出土状況から約45cmあったと思われる。また土壙の底から浅いピットが検出された。

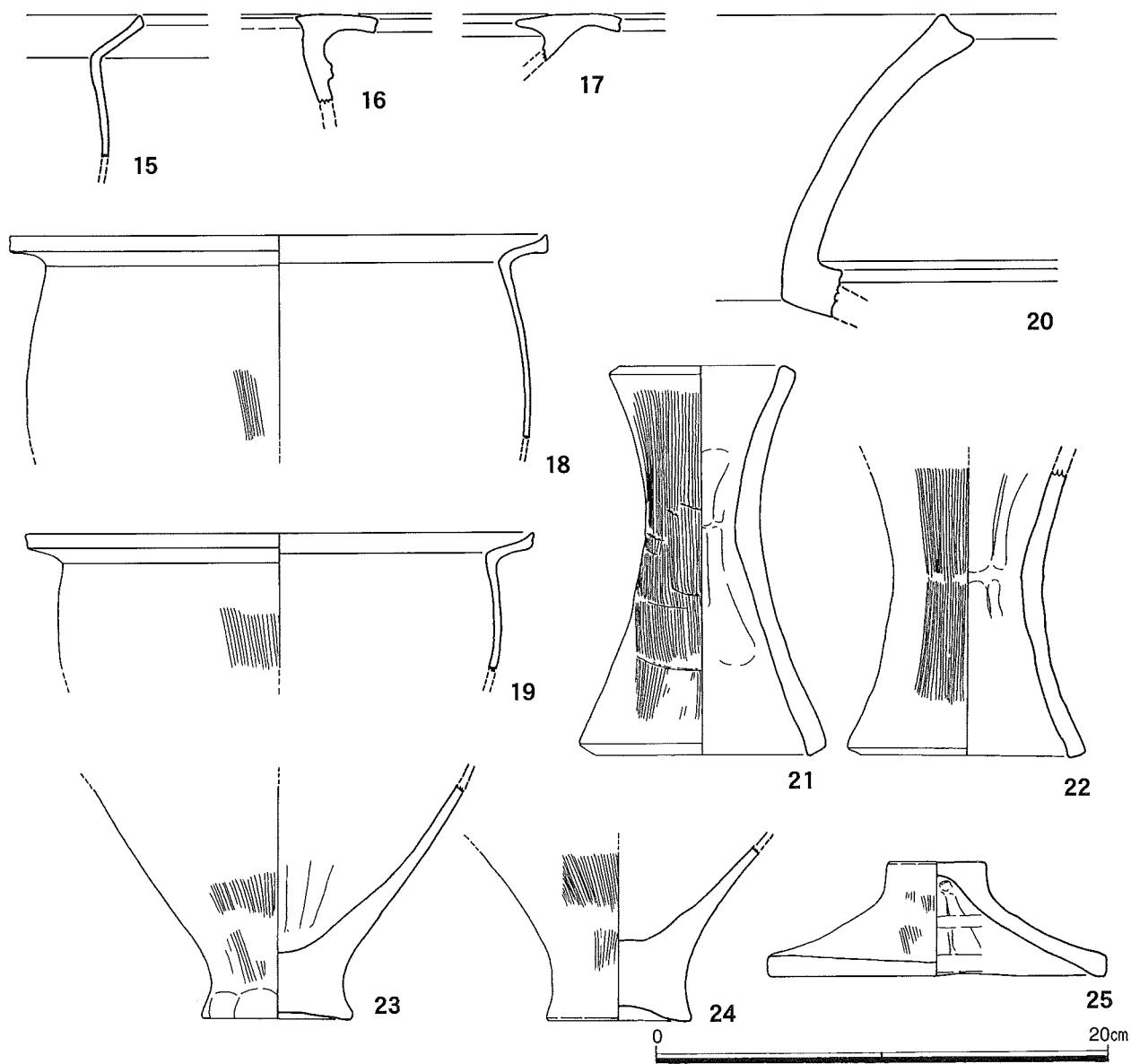
S K 2 出土遺物

15は口縁を『L』字に屈曲する甕である。口縁端部をやや跳ね上げる。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。16は口縁部の屈曲部内側に突帯をめぐらせ『T』字状に仕上げられた甕である。口縁部直下に一条の『M』字突帯をめぐらす。朱塗り痕が見られる。17は鋤先状口縁部をもつ高坏であると思われる。朱塗り痕が見られる。18は口縁端部を外方に跳ね上げる甕である。



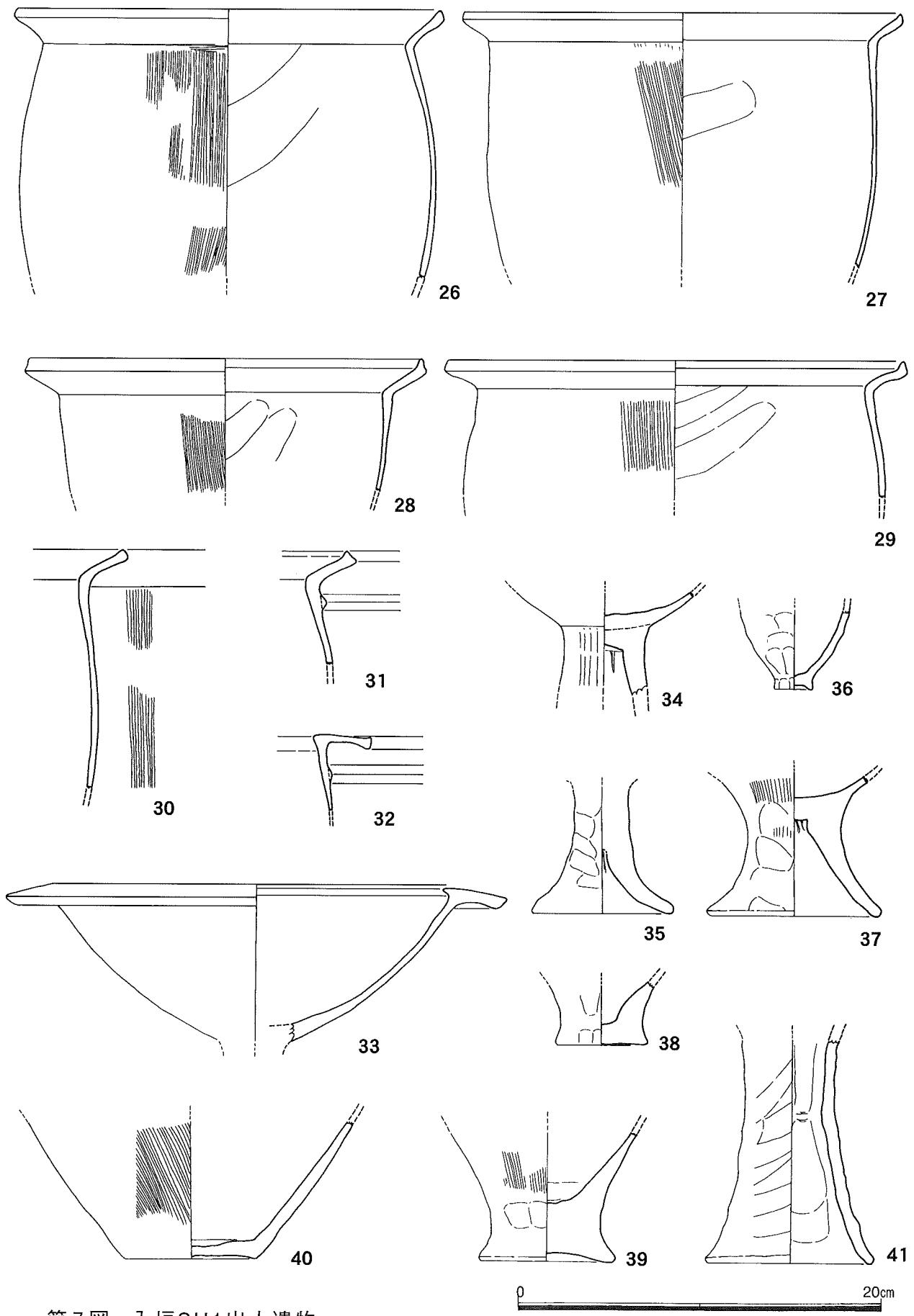
第5図 入垣遺構実測図

SH1実測図



第6図 入垣SK2出土遺物

胴部にハケ目を施す。口縁部に朱塗り痕が見られる。復元口径は、22.4cmを測る。19は口縁端部をやや跳ね上げる甕である。摩滅が著しいが、胴部外面にハケ目が残る。胴部外面に朱塗り痕か。20は口縁部が朝顔型に開く、大型の壺になると思われる。外面に朱塗り痕が見られる。21は『く』字に屈曲する器台である。内面上下端部はややつまみあげる。外面にハケ目を施す。また外面に朱塗り痕が見られる。復元口径7.2cm、復元底径10.8cm、器高17cmを測る。22も『く』字に屈曲する器台である。底部内面端部をつまみ上げる。外面はハケ目後に縦方向にナデを施す。底径10.4cmを測る。23は甕の底部になると思われる。やや上げ底。外面はハケ目を施す。底径10.4cmを測る。24も甕の底部になると思われる。上げ底で、外面にハケ目を施す。焼成もよく丁寧な作りである。底径は6.3cmを測る。25は蓋になると思われる。外面は摩滅が著しく僅かにハケ目が残る。復元口径は14.8cm、器高5cmを測る。



第7図 入垣SH1出土遺物

SH1

3トレンチから弥生時代の竪穴住居が検出された。前記したが、一部弥生時代の土壙(SK2)とかさなる。全景は明らかでないが、方形になると思われる。北西—南東約340cm、北東—南東が約360cmを測る。深さ約30cmほどであるがこれも遺物出土状況から約50cmほどであったと思われる。床面より3つのピットが検出され、主柱穴になると思われる。焼土も検出され炉と思われる。また竪穴住居の全体から炭化物が検出されており火災にあったのか。

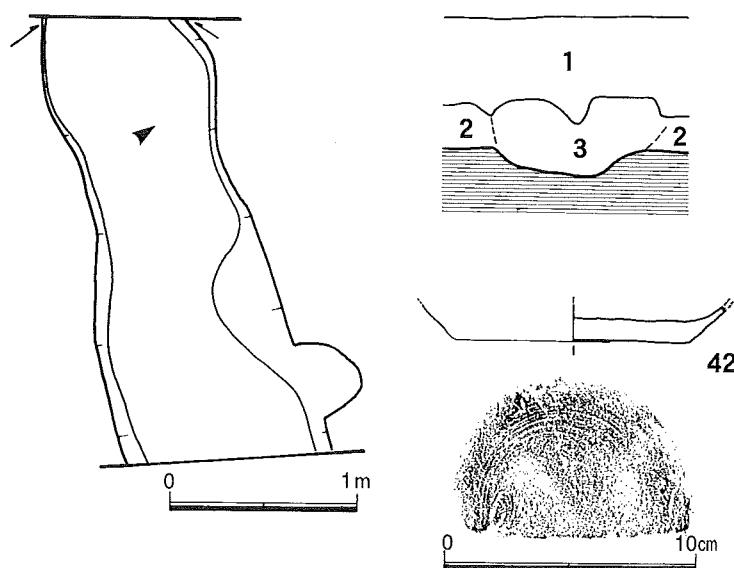
SH1出土遺物

26は口縁部を『く』字に屈曲する甕である。口縁端部が僅かに跳ね上がる。外面にハケ目を施す。復元口径23.4cmを測る。27も口縁端部を僅かに跳ね上げる甕である。26に比べ胴部の張りがない。摩滅が著しく調整は不明であるが外面にハケ目が残る。復元口径24cmを測る。28は口縁端部を上方に跳ね上げる甕である。胴部は張らず、やや内側に垂下する。口縁端部に朱塗り痕が見られる。また外面にハケ目を施す。復元口径24.6cmを測る。29も口縁端部を跳ね上げる甕である。口縁端部に僅かに朱塗り痕が見られる。復元口径25cmを測る。30は口縁部が『く』字に屈曲する甕である。外面にハケ目を施す。31は口縁端部を跳ね上げる甕である。口縁部直下に一条の三角突帯をめぐらす。摩滅が著しく調整は不明である。32は口縁部の屈曲部内側が僅かに張り出す甕である。口縁端部はやや下方に垂下する。胴部に一条の突帯をめぐらす。33は鋤先状口縁部をもつ高坏である。口縁端部はやや下方に垂下する。内外面とも朱塗り痕が見られる。摩滅外面著しく調整は不明である。34は高坏の脚部になると思われる。内外面とも朱塗り痕が見られる。脚部に縦方向のナデが施される。35も高坏の脚部と思われる。小型の作りで雑に感じられる。底部径7.7cmを測る。36はミニチュア土器の甕か。底径2cmを測る。37は脚部である。外面にハケ目を施す。また外面に朱塗り痕が見られる。38は甕の底部になると思われる。平底で底径4.8cmを測る。39も甕の底部になると思われる。外面にハケ目を施す。底径7.2cmを測る。40は壺の底部になると思われる。外面にハケ目を施し煤が付着する。復元底径7.1cmを測る。41は器台になると思われる。底部から上方へうず巻き状にナデあげる。内側も指削りで大変雑なつくりである。底径9cmを測る。

(2) その他の遺構

SD1

1トレンチより溝状遺構を検出した。溝はトレンチを東西方向へ横切る。遺構検出面より深さ15cm程であった。2層(2)と溝の埋土(3)が類似しており分層難であった。幅は約100cm、黒褐色土の埋土であった。



第8図 入垣SDI平面図、土層図、出土遺物

S D 1 出土遺物

溝からの出土遺物はほとんどなく、図示できえるものは僅かに1点だけである。また溝の底から約25cm程上で検出したため溝の時代は決めかねる。42は土師器の壊になると思われる。底径9.2cmを測る。底部に糸切りを施す。

(3) 小結

今回の調査の目的は、平成7年度より検出してきた弥生時代中期の溝の続を探索することであつた。しかし今年度の調査区からはこの溝の続きを検出することができなかつた。今年度調査区より西側は10m程で台地の落ち際になる。このことと今年度の調査結果から溝は直線には進まないと考えられる。

また今年度の調査では弥生時代の土壙2基、竪穴住居1基を検出することができた。1トレンチから検出された土壙からは、今回図示していないが、大型の壺の口縁部なども出土している。朱塗り痕の見られる土器も多く祭祀土器を一括廃棄したものと思われる。3トレンチの土壙と住居跡は明確な切り合ひは判断できなかつた。出土した土器も時期差は見られない。平成7年度より検出した溝より今回検出した遺構は時期は下ると思われる。溝とセットとして考えられるか疑問が生じており、今後の調査で明らかにしていく必要がある。

(参考文献)

『棒垣遺跡ホヤ池窯跡』「中津地区遺跡群発掘調査概報(VII)」中津市教育委員会 1994

『沖代地区条里福島遺跡東入垣地区』「中津地区発掘調査概報(VIII)」中津市教育委員会 1995

『安心院宮ノ原遺跡』安心院町教育委員会 1984

第三章 定留遺跡向地区の調査

1 調査の経緯と概要

現地は中津市北東部、標高13.5～16.7mの低台地上に位置する農村地帯である。南から北にかけてゆるやかに傾斜しており、畑が作られる微高地の間には、細長く水田がのびる。弥生、古墳時代の遺跡を包蔵する定留遺跡として周知されている。

この地に圃場整備が行われることとなり、工事に先立ち、試掘調査を行った。調査はまず重機による掘削で行った。調査対象地域は国道10号線北側から、JR日豊線の北側までの面積15.5haで、二条の水田地帯と、その間の畑部分である。重機掘削に際し、地形把握のため、谷部に垂直の東西方向に計48本のトレーニングを開けた。調査の主眼は遺跡の有無、水田、畑の開発時期、旧地形の把握である。重機で地山面まで掘削したのち、土層観察を行った。調査開始前、微高地に古代～中世の集落がひろがり、谷部に集落に伴う水田がひろがることが予想されたため、土層断面での畦畔の確認に注意した。

2 向地区の調査

(1) 水田について

水田は調査区の大半を占める。掘削の結果、地山面から20cm～70cmの土砂の堆積がみとめられた。地山は黄白色の粘質土で、一部、深掘りしてみたが、これより下には遺構面はみとめられなかつた。いずれのトレーニングにも何層かの水田面が確認できたが、主として暗渠排水が掘り込まれる昭和初期の上層と、灰褐色粘質土の下層とに分かれる。下層の水田面にはところどころ畦畔の高まりが確認できる部分もあり、いつの時代の水田面かが問題となつた。

東側の15トレーニングでは最下層の水田面の下から幅約3m、深さ約60cmの溝が検出された。溝の底には人頭大の石がころがつておらず、旧河道かと思われた。その上には黒色土ブロックと黄白色粘質土ブロックがまじった土が、本来の地山面までうめられていた。これは、水田開発のため、溝を人工的に埋め、平地に整備した痕跡と思われる。その溝の底には18世紀に比定される磁器碗の小片が出土しており、少なくともその時期まで溝が開いていたことを物語ついている。

また、西側谷の20トレーニングでは、地山削りだしの畦畔と、そこから掘り込まれた旧水田面を確認したが、その耕作土からも磁器人形（動物の頭か）小片が出土し、江戸時代の水田面であることが確認されている。ただし、このトレーニングではトレーニングを斜めに横断するように幅約50cm、深さ5cmの直線的な溝が検出された。削りだしの畦と直交する関係にあり、一つの水田の区画となる。現在の水田の形とは45度の傾きがある。同様の溝は19トレーニングでも同じ方向に確認されている。水田が現在の形になる、前段階である。

この地の灌漑は荒瀬井路から取水しており、江戸時代に大規模な開発がなされたことが予想される。荒瀬井路は、当時の藩主小笠原長胤の時代、下毛原台地上に水をひくため1686年に着工された。これにより、台地上は美田につくりかえられていったという。調査期間中は冬場であるのにかかわらず、水田横の水路は豊富な水をたたえていた。荒瀬井路の開発とこの地の水田開発の深い関わりをみる想いである。

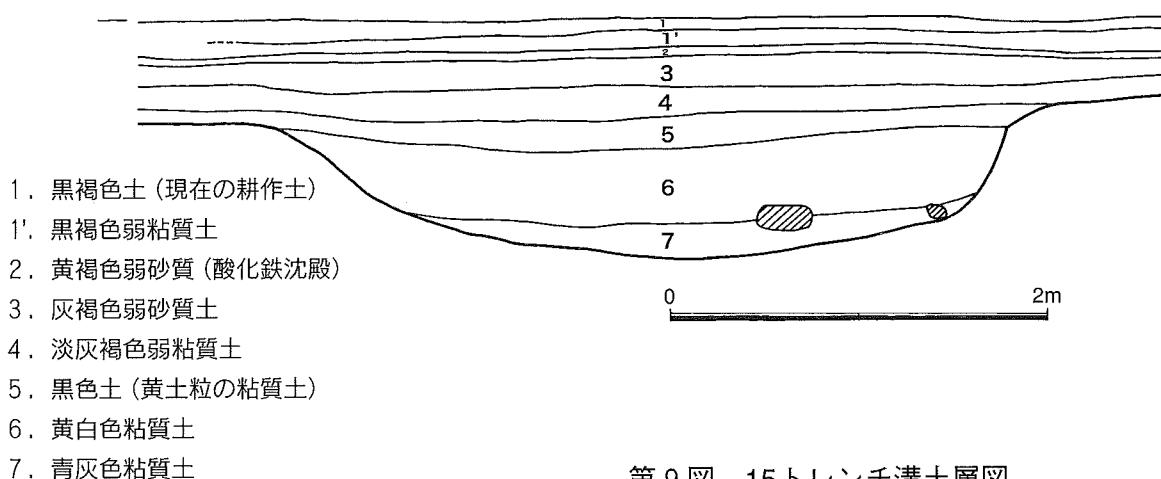
さて、江戸時代以前の開発であるが、6トレンチ床面より、1点のみ須恵器壺の小片が検出された。しかし、水田面から出土した、江戸時代以前の遺物はこれ一点であり、洪水で運ばれてきた可能性もある。古代、中世の水田の存在は今調査では確認できなかった。

以上その他に、3トレンチ、10トレンチで、床面に鋤跡と牛の足跡を確認した。足跡は鋤跡に並行して一定方向に進んでいた。3トレンチは現在畠、10トレンチは休耕田で、いずれも乾燥しているが、土層には水田の痕跡がみえた。3トレンチは昭和の初めまでぶどう園、その前は桑畠だったといい、水田の痕跡はそれ以前のものである。しかし、床面には近世茶碗のかけらが散見されたことから、そう古くはさかのぼらないことが予想される。以上のことから、総じて発掘で現在確認できる水田面は江戸時代以降のものであると判断した。

(2) 畠について

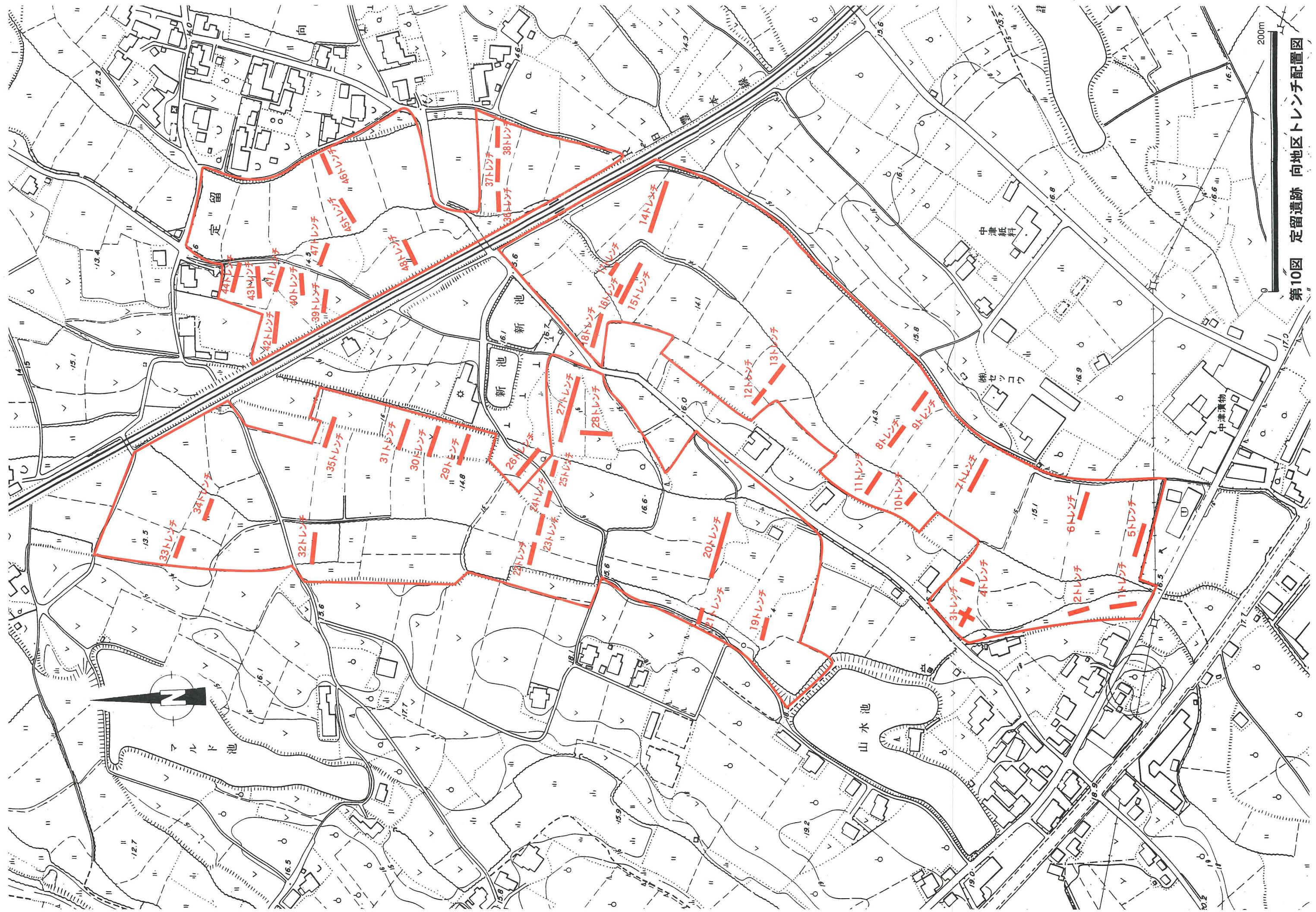
畠は西と東の水田のある谷にはざまれた微高地につくられている。畠の耕作土は淡褐色の柔らかい土で、調査区中、最も高い27トレンチ、28トレンチでは現耕作土を取り除くとすぐ地山面であった。この二つのトレンチからは時期はわからないが、土師質土器のごく小さいかけらが散見できた。しかし、遺構につながるようなものは確認できなかった。また、24, 26, 29, 30, 31トレンチを設定した畠は現地形はフラットで、水田部分で垂直にさがり、段がついている。しかし、調査の結果、この段は高い部分をけずり、水田側に土盛りをして人工的に造成されたものであることが判明した。遺物、遺構ともまったく確認できなかった。

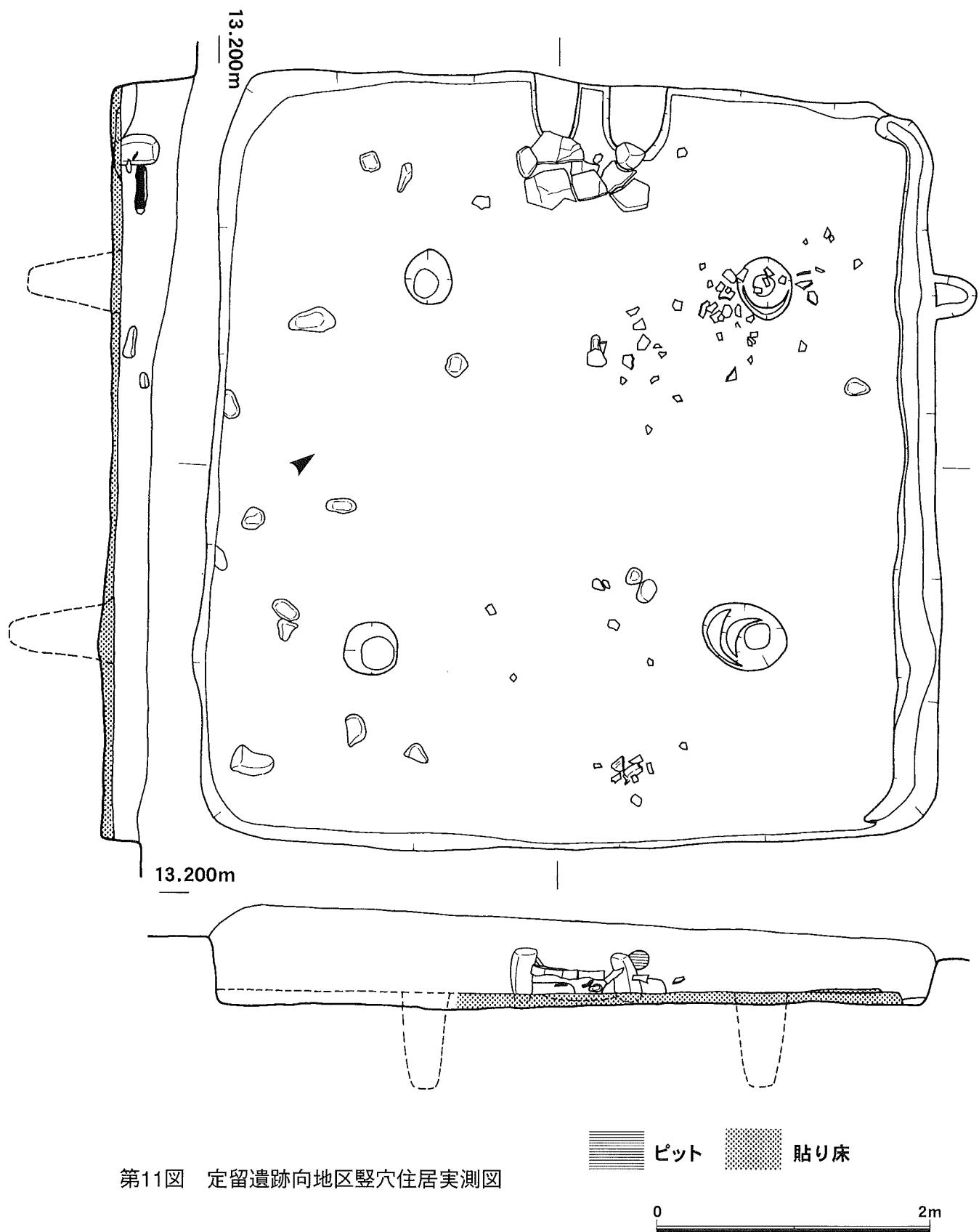
最後に線路脇の畠地に39～44のトレンチを設定した。39～42トレンチは先の畠部分と同じく、削平をうけており、遺構、遺物とも確認できなかった。当初遺構の期待された畠部分でまったく確認できなかつたことから、工法上削平をうけない場所ではあるが、43, 44トレンチを設定した。ここでも、東の水田面にむけて90cm盛り土をし、平坦面を形成していたが、44トレンチの東の最も低い部分で、古墳時代の住居跡を検出した。以上、畠部分はいずれも高所を削り、低所に土をはこび平坦面を形成しており、旧地形は大半が破壊されていた。



第9図 15トレンチ溝土層図

第10図 定留遺跡 向地区トレンチ配置図

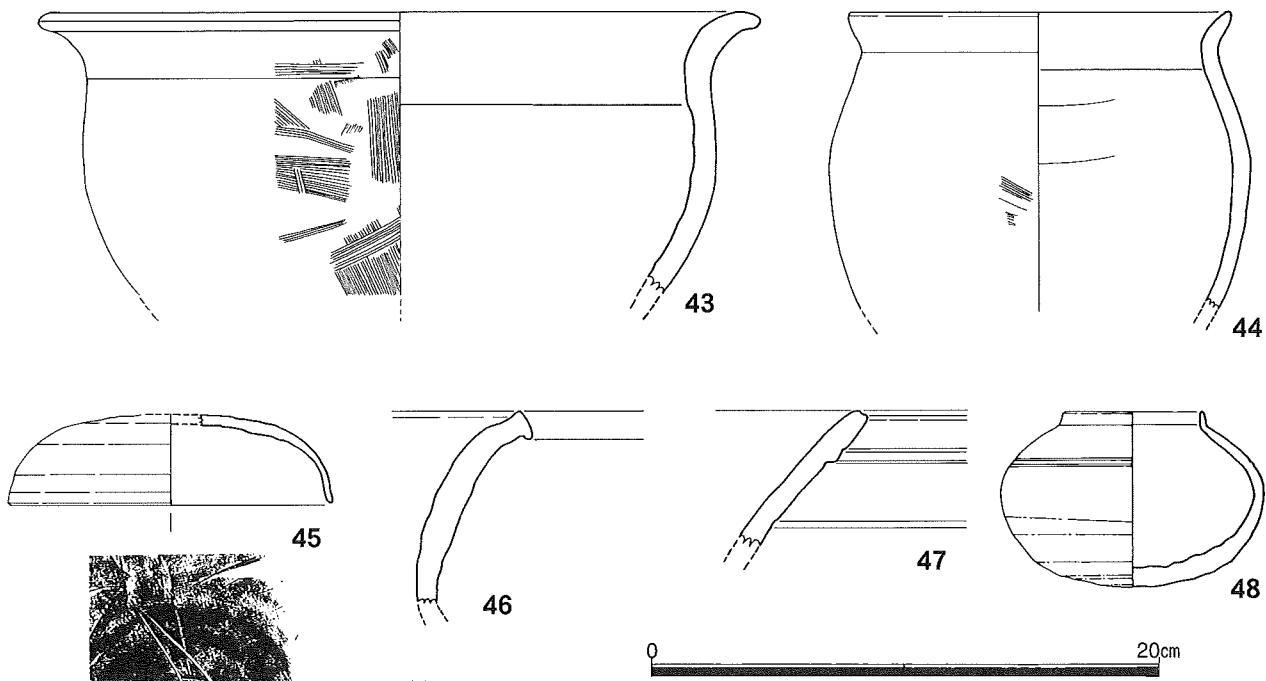




第11図 定留遺跡向地区豎穴住居実測図

(3) 豊穴住居について

44トレンチより古墳時代の豎穴住居を一基検出することができた。南北長530cm東西長520cm、深さ約60cmを測る方形の豎穴住居である。北側に細い溝がめぐっており南側にも溝があったと思われる。床面には黄褐色の貼り床が確認され、主柱穴4つは、この貼り床の上面から掘り込まれて



第12図 定留遺跡向地区竪穴住居出土遺物

いた。主柱穴の深さはいずれも70cm程である。また東壁にはカマドが造られていた。カマドには焼土と炭が堆積しており、袖部分先端に2つの立石、粘土塊が検出された。支脚は検出されなかつたが、住居のカマド周辺から赤褐色の細長い河原石が出土しており、これになると思われる。壁断面にピットがみられ、煙り出しの穴でないかと思われる。

出土遺物について

43は土師器の甕になると思われる。復元口径28.6cmを測る。外面にハケ目を施す。44も土師器の甕になると思われる。カマド内から出土したものである。外面にわずかにハケ目が残る。復元口径15cmを測る。45は須恵器の壺蓋になると思われる。口縁端部はやや外反し、端部は丸味をもつ。復元口径12.8cmを測る。また内面にヘラ記号か。46、47は須恵器の甕の口縁部になると思われる。46は口頸部は外反気味に上外方にのび、端部はやや下方に張り出す。47の端部は外方に張り出して肥厚し、方形をなす。48は須恵器の壺である。口径5.4cm、器高6.9cm、最大胴部径10.4cmを測る。体部上位に二条の刻線を有する。また底部に回転ヘラ削りを施す。

(4) 小結

調査の結果、水田の開発が確実にいえるのは江戸時代以降であった。当初期待された古代の集落と水田の景観復元はならなかつたが、この地の近世の井路に伴う開発の歴史を考える上で、貴重な資料が得られたのではないだろうか。調査区最北端での古墳時代の住居はここより以北に集落が展開することを予想させる。しかし、住居跡検出地点は圃場整備の範囲内ではあるが削平はうけない場所である。他の場所からは調査区を拡張すべき遺構は存在しないと考えられ、本調査の必要はない」と判断した。

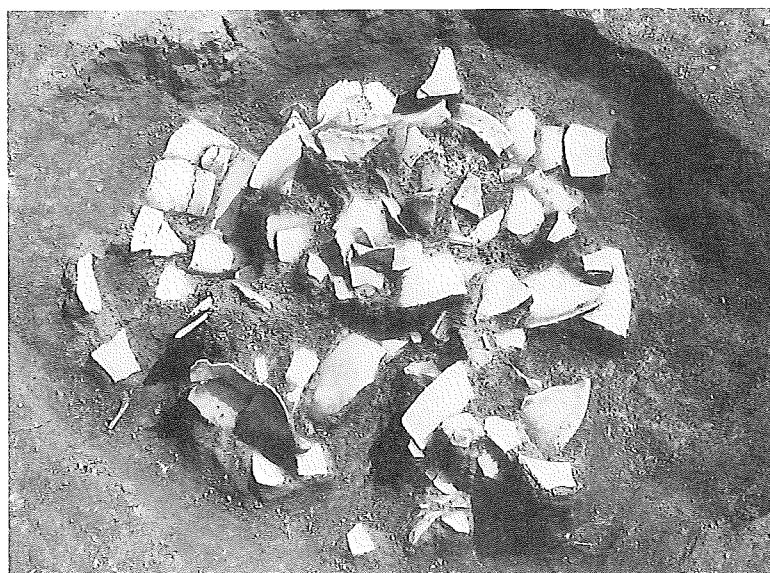
(参考文献)

『伊藤田城山窯跡群』中津市文化財調査報告第5集・中津市教育委員会 1985

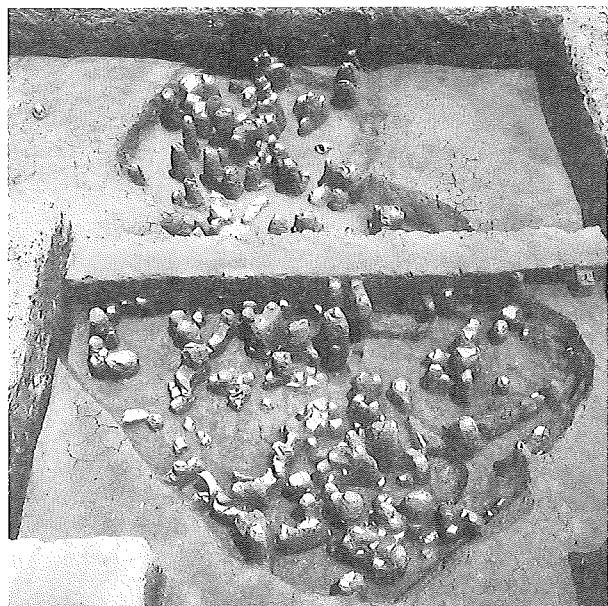
図版1 福島遺跡入垣地区



発掘風景



SK1 遺物出土状況

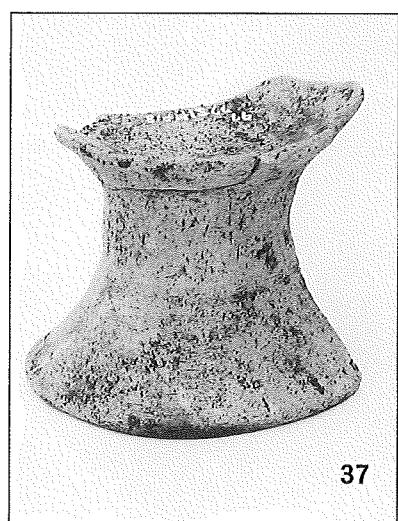
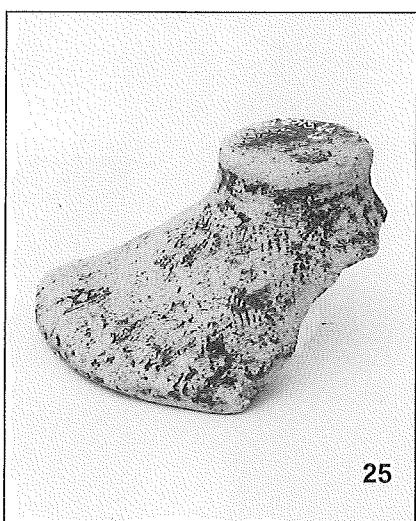
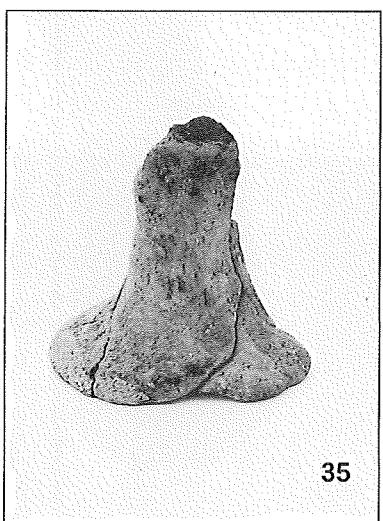
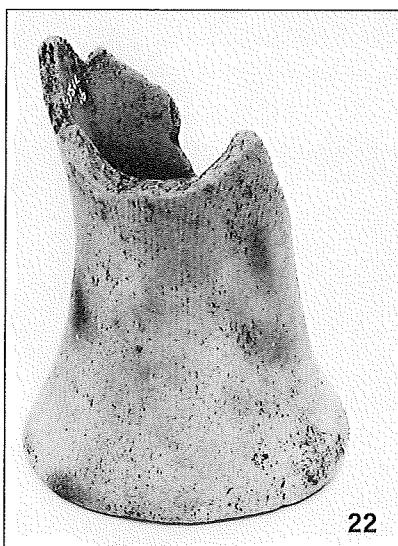
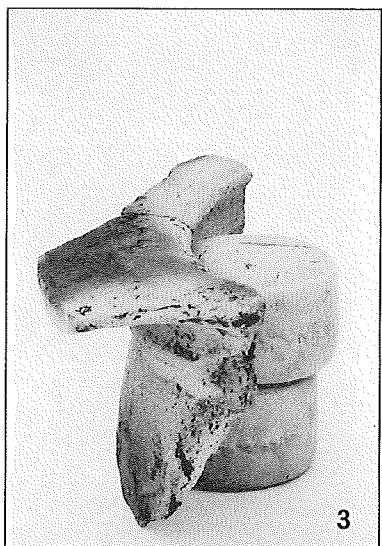
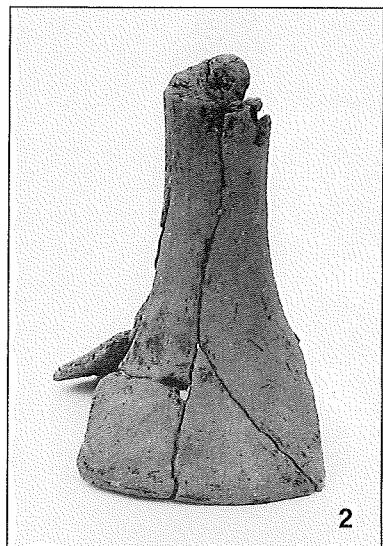


SK2 SH1 遺物出土状況、完掘



SD1

図版2 福島遺跡入垣地区



図版3 定留遺跡向地区



発掘風景



15トレンチ 南カベ



18トレンチから
14トレンチを望む

図版4 定留遺跡 向地区



3トレンチ 鋤跡



牛の足跡



24トレンチから
22トレンチを望む

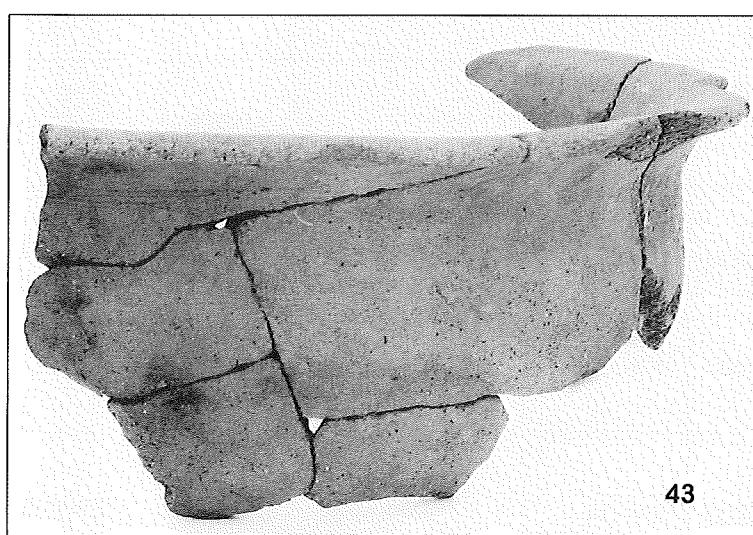
20トレンチ 東→西



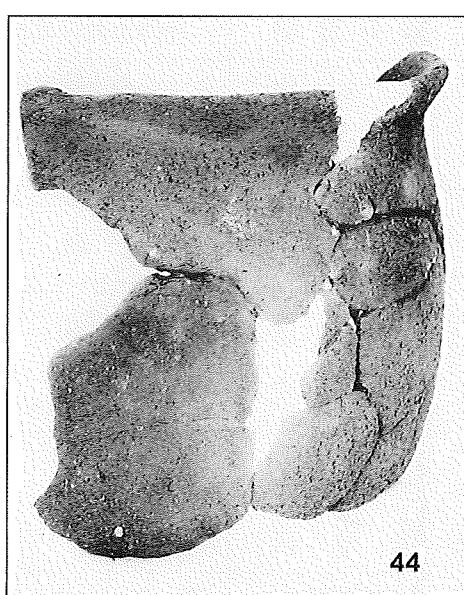
図版5 定留遺跡 向地区



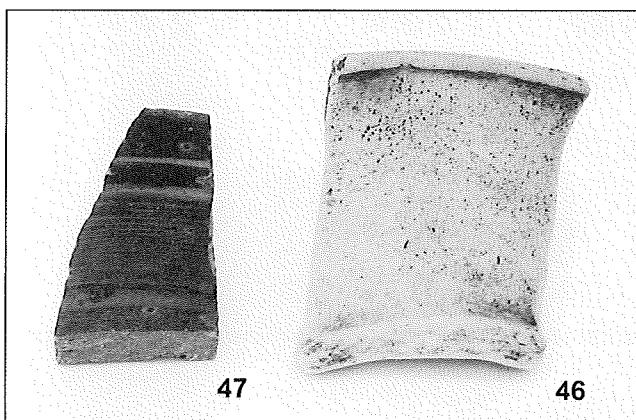
竪穴住居、カマド



43



44



47

46



48



45

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふくしまいせきにゅうがきちく さだのみいせきむかいちく							
書名	福島遺跡入墳地区(III) 定留遺跡向地区							
副書名	1997年度中津地区遺跡群発掘調査概報							
巻次	(X)							
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	高崎章子 花崎徹							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	大分県中津市豊田町14-3							
発行年月日	1998年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふくしまいせき 福島遺跡 入墳地区	大分県中津市 大字福島1258	44203	101051	33° 33' 23"	131° 13' 52"	1997 0527 ~ 1997 0630	450m ²	確認調査
さだのみいせき 定留遺跡 向地区	大分県中津市 大字定留	44203	101034	33° 34' 32"	131° 14' 48"	1997 1201 ~ 1998 0218	15.5ha	圃場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
ふくしまいせき 福島遺跡 入墳地区	集落	弥生時代	弥生中期の 土壙・住居		弥生土器			
さだのみいせき 定留遺跡 向地区	水田 集落	近世 古墳時代	水田 住居		須恵器 土師器			

福島遺跡入垣地区(Ⅲ)
定留遺跡 向地区

1997年度 中津地区遺跡発掘調査概報(X)
中津市文化財調査報告 第22集

1998年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 (株)川原田印刷社